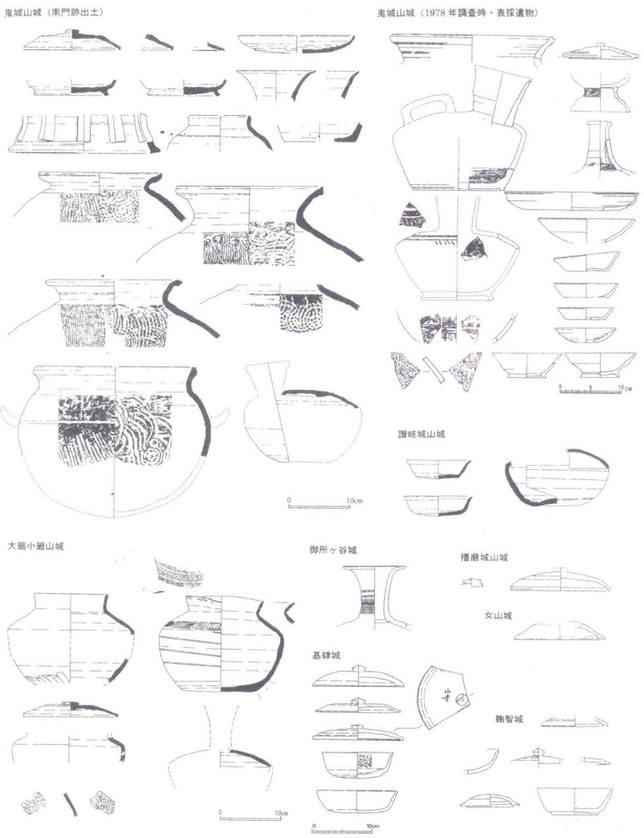
ようになり、机上の議論であった築城年代の問題も道がひらかれつつある。鬼ノ城、大廻小廻山城、播磨城山城、讃岐城山城、鹿毛馬神籠石、御所ヶ谷神籠石、唐原山城、女山神籠石で出土しているが、出土状況、出土量が少ないなど、決定不足であることは残念である。

鬼ノ城

岡山県総社市の鬼ノ城は、比較的発掘調査が進み、構造も相当明らかになっている。城壁は、１段の列石上に版築土塁が載る、いわゆる神籠石状のつくりが全体の８割強を占めている。水門跡、城門、角楼、城内には礎石総柱建物の城庫跡が複数みつかっている。朝鮮式山城の基肄城、大野城に類似したところが多く、記録には残っていない朝鮮式山城とも言える。

出土した須恵器の最古のものは、飛鳥Ⅲ期（650～680）の範囲にはいるとされ、飛鳥Ⅴ期のものまである。基準尺も古韓尺26.8cmが使用されているという。斉明天皇２（656）年の宮殿とともに両槻宮と呼ばれる周垣をもつ防衛施設が築かれたとする記事、斉明天皇６（660）年の城柵を繕修したとする記事とも合せて、築城期を660年前後に求めている。

朝鮮式山城でも、金田城は上限７世紀第３四半期～第４半期の須恵器を出土しており、大野城、基肄城、鞠智城でも同じ時期の須恵器が出土し、記録に残る築城の時期と合致している。



各山城の出土遺物（須恵器）　「溝渫第9・10号」

築城の目的

築城の目的については、先行研究もかなりみられるが、見解が一致しているとは言い切れない。朝鮮式山城が天智２（663）年の白村江の戦いで敗戦したことを契機として築城されたのは、記録にみられ、出土遺物からも推定できるので、天智３（664）年の水城の築城以降の記録と合せて、新羅の侵攻にそなえたことは、一致した見解といえる。しかし、記録に残された長門城・三野城・稲積城・茨城・常城は、朝鮮式山城とされているが、所在地が特定されていない。

神籠石式山城は、瀬戸内・北部九州地域に集中的に築城されており、規模も朝鮮式山城の半分ぐらいのものが多い。構造的にも列石線が全周していない場合が多く、内部に施設を持たない場合が多い。御所ヶ谷神籠石、唐原山城では、総柱建物跡が各１棟みつかっているが、時期

を決めることがむずかしい。

かって列石線が途切れていること、内部に建物跡がみつかっていないことから、神籠石式山城を未完成の山城ではないかと考えたことがあった。御所ヶ谷神籠石では、工事に粗密さがあることから、工期の短縮をはかる必要性があったためとし、要因を白村江での敗戦に求めて、７世紀第３四半期の須恵器、土師器の出土から、築城開始を白村江の戦い以前に求め、以後も継続して機能していたのではという見方もある。

高良山神籠石（勢至堂山付近のコーナー部）

現在の状況では、出土した須恵器の上限は７世紀第３四半期で、白村江の敗戦の663年とほとんど差がない。そこで、神籠石式山城も新羅の侵攻を防備する機能を持っていたことは十分考えられる。しかし、朝鮮式山城が嶮山城で、有事籠城型、神籠石式山城が緩山城で、攻撃主務型と用途が違うとの指摘もあるが、同列に考えられない部分もある。形態的に瀬戸内型と九州型に分類する方法もあり、瀬戸内型は鬼ノ城のように堅固につくられ、朝鮮式に極めて類似しているので、築城の目的も類似したことを考えてもよかろう。

九州型神籠石の分布をみると、大宰府を中心として配置しているようにも見えるが、相互関係はあまりなかったという立場で見ればどうなるだろうか。

発掘調査が進むにつれて、朝鮮式山城と神籠石式山城の距離は次第に近づいている。調査が進めば進むほど類似するところが増えてくることは確実で、形態的分類は可能だが歴史的意義は変わらないということになるかもしれない。

現状では、高良山神籠石は、列石線がわかっているだけで、いちばん内容がわかっていないという皮肉な結果になりかねない。